

保育者を目指す学生への授業効果について — オペレッタを教材として —

長 根 利紀代

I 研究の目的

1. 保育者として身につけたいもの

保育者としての基礎的な能力は、大学での理論と技術に加え、実習において実践力を身に付けることで、学生たちは保育者として成長していく。しかし、幼児教育が幼児の人間形成の基礎を培うとしている点から考えたとき、現代の学生を取り巻く環境は、保育者以前の一人の人間としての問題点を抱えている。ひとつには生活経験の不足、人間関係の希薄さ、精神的な弱さなど、本学の学生も例外ではない。保育現場においても、保育者・保護者・園児にもこうした点は指摘される傾向が年々強まっている。学生は、物事に対しても日常的に、やりたいことだけを、やりたい人だけで、やれる範囲内において楽しむ傾向が強い。こうしたことから、ひとつの目標に向かって協力し苦勞を共にして最後までやり遂げる、プレッシャーに耐え苦手なことにも取り組む、努力の先にある自分の可能性を見出す、相手の身になって考えられるよう視野を広げるなど、学生が体験を通して学ぶことが望まれる。そして、精神的・身体的に実体験を積むことで、目に見えない「心」の成長を図ることが必要と考える。その上で、子どもの立場を考慮した保育センスを磨きたい。また、オペレッタは就職後多くの現場で取り入れている実態があることも取り上げた理由のひとつである。こうした願いから、1994年度からオペレッタを授業の課題として取り上げてきた。教材は「ゾウのたまごのたまごやき」(藤田妙子著)に絞り毎年同じ脚本を使って繰り返し、1・2年生ごと、クラス別に発表することで競争意識を盛り上げ、1年生による2年生への憧れや尊敬の念を育ててきた。また、そこから2年生としての自覚と保育に向かう意識や自己教育力の向上を図り、学生の保育者としての土台作りに努力してきた。そこで、本研究では、2002年度入学生の授業を中心に1・

2年次の授業の年度を越えてオペレッタを課題として研究し学生の学習効果をアンケートから考察したい。尚、オペレッタは、1年次は保育内容「表現」、2年次は「幼児音楽」で実施したが、いずれも選択科目であることから、両科目履修者を研究対象としている。

2. これまでのオペレッタ指導の経緯 (1年生)

○ 1994年度～1995年度入学生

この期間では、1年次科目保育内容「表現」におけるオペレッタを「ゾウのたまごのたまごやき」で体験し、学園祭にて同じ脚本を使った2年生のゼミナール選択学生による研究発表を自由見学したが感想文の提出はない。1年生の作品は脚本どおりまとめたに止まっていたが、学園祭では脚本をアレンジが加えられた2年生の作品を見て、その照明や衣装など全体のできばえに驚くこととなった。これは自分が前もって体験していたものただけに比較しやすく驚きも大きい。学生のこうした作品との出会いを毎年同じ脚本で繰り返すことによって、前年を参考にしてさらに新しいアレンジが生まれ、作品の様々な工夫や学生の演技力の力量が向上した。また、卒業してからも学園祭を訪れ、行事における子どもの指導の参考にする卒業生も現れた。毎年同じ脚本によるものであったため、作品に親近感が持て応用や扱いが手軽なことが考えられる。学園祭を訪れた子どもたちの中にもファンができ、翌年の発表を楽しむ子どもたちも見受けられた。しかし、授業状況が変更されたため、1996年度は2年生の発表はゼミ生ではなく、少人数でミュージカルクラブが結成され2年次発表を行った。

○ 2000年度～2004年度

2000年度より授業でオペレッタを再開した。2000年度入学生は、1年次科目保育内容指導法「表現」でオペレッタ「ゾウのたまごのたまごや

き」の作品作りを体験。2年次科目「幼児音楽」に同じ脚本で発表。2001年度入学生は、1年次でオペレッタを体験し、2年次で研究発表をした。2002年度入学生は1年次にオペレッタを体験した上で、2年生（2001年度生）の研究発表を見学することとなり、2年次に2003年度入学の1年生に自分たちの研究発表を披露することになった。しかし、2003年度入学生は、2年生の発表を観る前に同じ脚本をペープサートで作品にまとめたので、オペレッタとしては研究していない。その理由として、これまでのオペレッタとしての作品作りが他の授業との兼ね合いで時間的、量的な面で学生の負担が大きすぎると考え、負担軽減を考慮したが、問題は変わらず、特に人間関係は例年と同じ問題を呈し練習時間など時間的な問題も人間関係に根ざすところが大きかった。そこで、2年次では科目選択者に提案し、グループを自由につくり、作品もオペレッタに限らず人形劇やタペストリーシアター、大型絵本など選択できる様にし、またオペレッタも脚本を自由に選択できるようにした。しかし、学生の主体性をより重視したことや多様なグループと数の増加で教員の手が入りにくくなりその分だけ問題が山積し、かえって指導が煩雑になった。2004年度入学生は、カリキュラムの関係で、オペレッタの経験は何もないまま、2年生の研究発表を見学し感想文を書いている。こうした経緯のなかで、オペレッタを中心にして先輩や同級生、後輩との関わりにおける点で2002年度生が経験に一番まとまりがあると考えた。

3. オペレッタに関する主な授業の流れ

期間	授業内容	主なねらい
一年次	教材「オペレッタ」の紹介と体験	オペレッタという教材を知り楽しみながら作品作りを経験する
二年次	発声・発音の指導及び教材を通しての歌唱力・動き、リズム感、表現力	オペレッタの練習と発表を通して様々な表現力と保育者としての基本を身につける



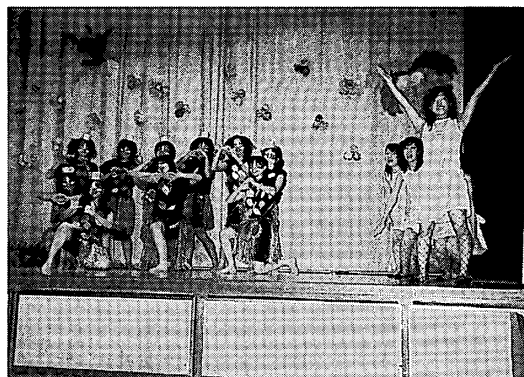
写真②



写真③



写真①



写真④



写真⑤



写真⑥

4. 学生の主な学習ポイント

(発表は1・2年次いずれもクラス単位とした。)

1年次

- ① オペレッタとの出会いと作品作り体験
- ② 作品をビデオで観察し修正 (中間チェック)
- ③ 1年次研究発表で1・2年生に作品披露 (同級生2年生からの感想を個人的に依頼し参考にする)
- ④ 同じ脚本による先輩の研究発表の観賞と感想文の提出

2年次

- ⑤ 2年次授業での取り組みと音楽的力量的の見直し及び作品作り
ビデオによりこれまでの先輩 (卒業生) の作品の観賞 (作品作りへのヒント)
- ⑥ 自分の作品をビデオで観察し修正 (中間チェック)
- ⑦ 研究発表により1年生や他のクラスへの作品披露と他のクラスの作品観賞、自分のクラス発表ビデオ鑑賞 (1・2年生次比較)
- ⑧ 1年生による作品への感想文により作品の反省評価
- ⑨ ビデオにより同じ脚本による幼稚園児の発表作品 (15分程度) 及び保育者の保育場面「導入部分」を観察
- ⑩ アンケートの作成により学習内容の再確認

5. 2年次作品発表の経過

「作品発表までの授業の流れ」

- ① 発声、発音、台詞、歌唱 (自由選曲) など指導とテスト
- ② 脚本紹介と役決め、資料配布

- ③ 配役ごとの歌の練習と簡単な振り付け
- ④ 配役ごとの歌・台詞・動きの練習
- ⑤ 配役グループ毎の舞台配置と動き (登場・退場・立ち位置など)
- ⑥ 衣装・小道具準備、衣装合わせと着用しての稽古
- ⑦ 全体の流れをピアノ伴奏に合わせ通し稽古
- ⑧ 背景、音響、照明など全体的、総合的チェック
- ⑨ リハーサル
- ⑩ ビデオ撮影と見直し
- ⑪ リハーサル
- ⑫ 研究発表本番

6. 作品発表までの過程に見る問題点

① 能力面

ミュージカルや演劇鑑賞経験がない学生が目立つ。知識や体験が乏しく、登場する人や動物、時代背景と人物描写、衣装への想像力や創造力不足。また、姿勢、立ち居振る舞いのだらしなさ。無意識な言動、視野の狭さ。体力、持久力、忍耐力不足。時間的要領や手順の悪さ、不器用、表現力に豊かさが無い。特に自信のなさが目立ち、本来もっている能力を発揮しようとする意欲が生まれにくい。本心はやりたくてもうまく機会が作れない様子が見える。役割分担し互いの能力を生かした活動ができず、道具やものの片づけや始末の面にその場限りの視野の狭さが何時の場合にも課題となる。しかし、幼さが気になるものの、学生の純粋さや素直さ、納得すれば一生懸命努力し人への思いやりある優しい面と献身的な態度を持ち合わせていることは注目すべき点である。

② 人間関係面

役割分担不明確、リーダーというより仕切家、人任せ、依存、過度な遠慮、事なかれ主義、力関係、個人攻撃、引っ込み思案など、全体的に一部の強い得意意識のある学生に追従し発言しないことも多い。リーダー役に立った学生は他の学生の意見を引き出す力がなく、一方的に自分の考えたものを押し付ける形になりやすく、話し合いができてにくい。全体的流れをリーダー格のグループが相談している間、他の学生はただ待っている傾向が強い。配役も仲良しグループでまとまる傾向があり、本当にやりたい役になりにくい面がある。こうした点を予測し、クラスによっては最初からくじ引きで役決めをしたところもある。ともすると、実力の無い学生が足を引っ張ることになったり、グループからはみ出し、置き去り、また、個人攻撃の対象になることもある。

③ 表現面

声量やリズム感が不十分で仲間についていけない。衣装や小道具の着こなし及び使いこなしが不十分。舞台上映えない、付けると動きにくいなど、役をこなす全体的イメージができない。振り付けができず、できても多くの学生は幼稚で限られた振りを繰り返すのみ。特に、動物など飛ぶものといえば、ほとんどの学生は両手を羽に見立てて上下にバタバタ動かすことしかできない。発声も苦手で声量が不十分な学生が目立つ。発音、歯切れが悪く演劇的表現力が乏しい。表情に豊かさが無く、指先・足先など細かいところに神経が行き届かない。衣装や小道具、背景や大道具など練習よりつくることばかりに熱中してその効果やバランスなど全体を考慮する点が非常に弱い。主体性がなく人の真似が目立つ。

7. 問題点に関わる教師の指導・援助

① 能力面

能力に関しては、多くの学生が経験不足と勉強不足。苦手意識と自信のなさによるところで表現力が発揮できず結果に現れないと考えた。そこで、基礎的発声や発音について音・台詞・歌唱をとおして教師が実演し具体的に手本を示しながら丁寧に指導。体育館のステージの上で必要な声量を体感できるよう指導、テストも実施し努力を継続し

見につけられる工夫をした。役作りについても、言葉だけでなく学生の振り付けの手直し、アドバイスだけでは振り付けのできないグループへの見本、その役にふさわしい言動や立ち居振る舞いも実際に踊ったり演じたりして実例で手本を示すようにした。

② 人間関係面及び表現面

ここでは互いに言いたいことが言い合えない力関係が暗黙のうちに根底に流れ、全体的に心に溜め込む学生が多い。そこから次第にやる気喪失、グループ分裂など不適切な受講態度が見受けられるようになった。この頃、教師が意識して受け止めていた個人的な苦情の訴えや相談が増加していた。そこでその内容から判断して授業時間の一部を使い、クラスごとに円形にした上で、思っていることを自由に発言できる機会をつくった。すると、自主的に反省や謝罪、要望や感謝など各クラスとも半数以上の学生が発言し、相互理解とわだかまりの軽減ができた。また、授業時間はもちろん時間外にも個人的な発声や歌唱指導個人やグループ毎の振り付けに対するアドバイスや手直しなどの要望にも応じ、個人の表現力レベルを上げることでグループ内やクラスでの不調和傾向や離脱感、不満、コンプレックスによる違和感の払拭に勤めた。そのため、学生によっては何度もその要望に応じることとなった。さらに、クラスごとに発表が近づくにつれてやる気や危機感から、早朝、授業後を問わず完成度へのアドバイスの依頼や施設使用願いが出され、そのたびに施設管理や指導のため勤務したが、追い詰められなければ走り出さない学生の日常生活態度の改善が課題となる。

II 研究の方法と内容

2002年度生アンケートを通して考察する。

研究対象：2002年度入学生における2年次選択科目「幼児音楽」履修者

教材：オペレッタ「ぞうのたまごのたまごやき」
藤田妙子著 フレーベル館 1991.

学生の取り組み：アレンジは自由だが各クラス
20分以内に作品をまとめて発表する

有効アンケート枚数：142枚（1年次に「音楽表現」を履修していなかったり設問項目に関係する授業に欠席した学生のは省いた）

アンケート実施期間：2003 年 10 月

主な項目：

- ① 1 年次科目「保育内容指導法 音楽表現」の取り組みから学んだこと
- ② 先輩の「研究発表」を観て学んだこと
- ③ 2 年次科目「幼児音楽」の取り組みから学んだこと（主に練習について）
- ④ 1・2 年次のビデオを観て学んだこと
- ⑤ 2 年次科目「幼児音楽」の取り組みから学んだこと（主に発表について）
- ⑥ 子どものオペレッタ及び保育者の指導法（導入）をビデオで観て学んだこと
- ⑦ 授業としてオペレッタを体験したことで「保育者を目指すもの」として学んだもの
- ⑧ 1 年生の「感想文」を読んだ感想

Ⅲ 研究結果と考察

2002 年度入学生（以下 02 生とする）

- ① 1 年次科目「保育内容指導法 音楽表現」の取り組みから学んだこと

ここでは人間関係に関する項目を取り上げた人数が一番多く、作品作りの上での人間関係の難しさに直面し「チームワーク」の重要性をあげている。学生が活動を進める中で「協力」の大切さやすばらしさに気づきながらも「話し合うこと」で自ら意見を持ち相手に伝えることに苦慮しているのが分かる。音楽表現に関しては、表現の楽しさや難しさに加え「リズム」の効果に着目すると共に、あらためて「オペレッタというものを知った」ことが記述されている。ここでは「自分自身に関するもの」で全体の中での自己点検をする姿も現れているが少数で見方も浅く、「楽しみ方」に重きが置かれている。（表 1）

- ② 先輩の「研究発表」を見て学んだこと

先輩の作品に対しては、まず「脚本のアレンジ」に驚嘆しその表現方法や工夫による作品の雰囲気の様変わりを見ごたえに驚きが隠せない。自分たちが思いもよらない様々なアレンジで 4 クラスともまるでイメージが異なり、A クラスはアラビア風、B クラスは王様や后、王子など洋風、C クラスは殿様や姫、侍に地蔵まで飛び出す和風、D クラスはやしの木繁る南国風とバラエティーに富んでいたことから、「クラス独特のカラーの面白

さ」などとクラスごとの個性が明確に見られとても同じ脚本によるものとは思えない作品に仕上がっていたことでアレンジや作品の仕上がりに大きな関心が寄せられている。また、手づくりの衣装や舞台道具、個々の学生の演技や表現力、特に動きの大きさやメリハリ、声量ある歌声から発声への関心へとそこから一気に 2 年生に対する尊敬の念も急浮上して、「1 年生とは全く違いすばらしい、先輩のように努力する」と作品作りに取り組む姿勢も強く引き出されている。これらは次年度に向けての新たな作品を生み出す原動力となり明確な目標になったと考えられる。しかし、まだここでは「一人一人の存在」を特に取り上げているのは 4 名とごく少数に留まっている。（表 2）

- ③ 2 年次科目「幼児音楽」の取り組みから学んだこと（主に練習について）

2 年生になって刺激を受けた先輩の作品を念頭に、理想に向かって走り出したものの、それぞれの思いが炸裂し、ひとつにまとめるころに相当苦慮したことが分かる。ここで記述が集中したのはなんとといっても人間関係で、「クラスのまとまりと協力」を 58 人が取り上げているが、内容を見ると「信頼関係、同じ目標、真剣に協力、意欲的に取り組む」と作品に取り組む姿勢が前向きになっている。さらに、「影で頑張る人、リーダーの大変さ、皆が同じ思いではない、友達の大切さ」と集団を通しての個人への視点が深まりを見せ、設問②で「一人一人が大切」と「個」の存在を捉えていたのは 4 名だったがここでは、24 名と増加している。「表現あり方」は「動きや振り」も設問②に比較し 14 から 23 人に上昇し、「さらに細かな部分に気を配る、練習の大切さ」などにも言及するようになってきている。ただ、「発声」に関しては設問②が 21 名だったのに対してここでは 18 名と減少した。「表現のあり方」については 32 名が「難しさや厳しさ」に戸惑い「恥ずかしがらない、身体を使う、あいまいにしない、」と役になりきるため「客席に向かって声を出さないと聞き取りにくい、語尾の使い方」など見る側に立った演技への視点で自分を見直し葛藤している様子が分かる。そして、練習の大切さも 10 名が取り上げ、7 名と少数だが「自分の成長」に意識し始めている。（表 3）

④ 1・2年次のビデオを見て学んだこと

ここでのビデオは練習の一環で発表前の作品の見直しが主な目的として発表前における作品の中間チェックの意味を持つ。1年次でもビデオでチェックするため撮影していたことから、この時期に1・2年次を比較できるよう同時に放映した。その結果、設問③で数値が落ち込んでいた「発声」がここで一気に大きくなって33人を示した。さらに大きな数値を示したのは作品の「完成度」76人で、特にここでは指先、足先、目線、姿勢、表情など、非常に細かい点に注目できるようになっている。そして、自らの「作品」に「時間と努力の分だけよいものになった、練習したのとしなのとは全く違う」と努力への成果を実感し、「全体のメリハリ、だらしなさが目立つと見ているほうはつまらない」や「全体構想の仕方、むやみに違う曲を入れても変、オリジナリティーが裏目に出る」と作品の視野も広がり評価に対する質も向上している。さらに、1・2年次のビデオを比較できたことで自らの姿を通して「成長」が自覚できたことを31人が示し、小数であるが8名が成長の不十分さを自覚し反省している。

⑤ 2年次科目「幼児音楽」の取り組みから学んだこと（主に発表について）

これまでの準備段階を経てやっときつめた作品発表の経験から「クラスのまとまりと協力」に触れた47人学生の記述から、学生間ではこの面で苦慮したことが内面の成長に繋がっていることが窺える。ここでの項目の内容をみるとこれまで「協力」という言葉が「団結力」へ変わり、「励ましあう仲間、個性を出す、みんなの意見、心の一致、人に頼らない」に加え、「一人欠けても完成しない、最後の最後まで皆で一緒にやっているという姿勢を崩さない、精一杯やれば気持ちが伝わる、みんなの意見を取り入れる楽しさ、一人一人がクラスのために頑張る、協力することによってこんなによいものができる」と葛藤を乗り越えて実感した人間関係の深まりとものごとに取り組む前向きな姿勢に自信さえも認められる。また、大勢の人に披露することでその反応を体感し「人に見せること」26人、「やり終えた喜び」23人が目立つ。ここでは、自分の「頑張り」や「楽しんでやっている気持ち」が見る側に伝わり「見ている

人が楽しんでくれる喜び」、「演じる側と見る側がひとつになって楽しむ」事をあげ、「達成感、感動、楽しさ」など形の上での出来や上手下手、正確さを求めるのではない貴重な学習をしている。それは、目には見えないが保育者として今後の子どもの指導に大切な「心」や「感性」に響く「思い」を味わえたことである。しかし、こうした結果を生むには「練習の成果」や「体験」を取り上げた8名の中の「困難から逃げ出さず力を出し切ることでいい結果がでる、一生懸命やることの大切さ」を挙げているように「人間形成の基礎」とも言うべき「努力を続けること」の意味を実感できたものと考え。保育におけるオペレッタなどの教材を幼児教育の中でどのような「ねらい」の元にどう扱うべきか。どのような子どもの体験を準備すべきなのかについて身をもって理解してほしいと願って指導してきた。今回の発表が「大勢の前でやる貴重な体験」として学生に印象深く、発表を通して学んだ様々な「思い」をさらに明確に「保育」につなげる目的で、この後の授業で同じ脚本による子どもたちの作品と保育者がこの教材を初めて子どもに紹介する保育の「導入」部分をビデオで紹介することとした。

⑥ 子どものオペレッタ及び保育者の指導法（導入）をビデオを見て学んだこと

子どもの作品の紹介と保育者の導入部分は、同日に前後してビデオを映したこともあり、答えが重複したことから、両質問の回答をまとめて考察することとした。この作品は、学生が取り組んだオペレッタと同じ脚本の元に15分程度にアレンジされ、3～6歳の幼稚園児（附属幼稚園）50名ほどを混合で構成されており、発達遅滞、自閉的傾向の障害児3名（年長2名、年中1名いずれも男児）も参加している。そこで、幼稚園児の作品を観賞した後でこの作品に対する保育者の「導入」のビデオを見て学んだことについて質問した。ここで第一に学生に注目されたのは、まず、子どもの様子で、「子どもの姿」の41名が「楽しそう」22名や「生き生きしている」8名、「障害児も一緒にやれる」11名などに目を留め、自然にその子なりに役をこなしているのに関心を深めている。また、子どもの能力や表現力に「すごい力を持っている、子どもでもあそこまで出来ることが

分かった」や「一つ一つの動作が大きい、自分たちとあまり変わらない」、さらに「自分の役割がわかりテキパキ動く、周りの様子を見ながら演じる」など「子どもが自分で考え自分で表現」できることに驚いている。さらに、子どもの出演場面には3・4・5歳3人の王様の腰掛ける椅子以外背景も大道具のみで子どもの立つ位置に何の印もないこと。教師の指示もピアノを活用して動作のきっかけは送るものの、子どもの表現の流れはピアノ伴奏を合わせることに重きを置いている様子に注目している。そして、ピアノは「子どもの様子を見ながら弾く、歌い始めが分かるように弾く」と具体的にこうした子どもの活動を支える保育者の活動も取り上げ、「子どもの楽しめる環境作り」に関心を深めている。保育の「導入」としては「素話」を活用した具体例を観察したことから、導入を素話から始めることや導入の大切さ、「素話」の与え方や効果などを「導入次第で子どもは変わる、導入をしながら子どもたちが唄を覚えてしまっている」と気づき「教えるのではなく楽しめるように自然に導入していくとよいことが分かった」と具体的に学んでいる。また、それを通した子どもの姿から改めて保育実践における「指導法」を再確認し「子どもに合わせる、自然な形で子どもから引き出す」方法や繰り返しの効果、「子ども同士の関係」に注目できるようになった上で、子ども理解の重要性や子どものやる気、さらに環境構成の大切さに理解を示している。そして、こうした保育を実現するための保育者の表現力や力量の面に高い関心が集まっている。(表6)

⑦ 授業として「オペレッタ」を体験したことで「保育者を目指すもの」として学んだこと

この項目でも「人間関係」の占める割合は46人と多いが、「協力することの大切さ」20人に加え「集団の中での個人、アイデアを出すこと」の大切さが明確になっている。そして「自分ができないことを子どもに伝えられない、体験していること自体がとても大きい」と机上の空論によらない「経験の大切さ」を26人が述べ、「自分自身が楽しんでいる姿を見せる、子どもに言葉で教えるでも駄目」と保育の中で子ども自身で気づけるような「伝える」ことに言及し、「子どもの気持ちになって学べた」17人では「自分の感じたこと

を子どもたちに当てはめるようにしたい」など「子どもの手本になる」とした20人や「子どもは保育者の真似をする」6人とこれまでの実習経験を考えた経験的学習の手ごたえを見せている。そして、保育方法において「子どもの主体性、子どもの個性を生かす、導入・環境構成の大切さ」を改めて記述している。さらに、表現法について「楽しく表現」する意味や「見る側の視線」を意識した作品の捉え方、保育の心構えとしても「まず皆が楽しむ」と遊びを通しての保育の基本に行き着いていることに注目したい。また、表現の際の頭の中から指先までの細かい点にも目を向けることが身についたことは子どものモデルとしての保育者の能力の向上が期待できる。「保育者を目指すもの」という自覚から、自分自身としても「恥ずかしがっていては駄目、努力をしなくて楽をすることは無理、中途半端な気持ちではいいものはできない、とにかく自信をもち失敗を恐れない」、さらに、「子どものモデルとして誠意を尽くして物事に参加する、子どもの前では普段の自分を捨て子どものための自分を作り出す、普段の保育でもしっかり自分を持って子どもの前に立つ」と内面的な成長も認められる。

⑧ 1年生の「オペレッタ」の感想文を読んだ感想

学生は、これまでの様々な場面からその学生なりの内省が進んでいる様子を確認し後輩の感想文の一部のコピーを公開した。ねらいは2年生の自己評価に第三者的視点を与え、1年生は例年感想文の内容に大きな個人差が見受けられることから、今後の学習面へのひとつの手本や参考となるよう配慮している。そこで、学生の記述を見ると、「努力や思いがよく伝わっていてうれしかった」42名、「工夫したことに気づいてくれた」11名、「細かいところまで見てくれた」33名と自分の努力が認められた喜びを、まず噛み締めている。中には、10名が「ほめられすぎて戸惑った」と述べながらも「完成度を改めて知ることができた」9名など自分が思ったより評価が高かったことで自信に繋がる足がかりができてきたと考える。この点は、学生の性格的な捉え方のちがいはあるが「表現したいものが演じられた」8名や「後輩の役に立てた」11名、「1年生の参考になるとよい」

21名のように積極的に意見から、さらに「1年生が感動してくれてよかった」22名とここでの自信が先輩としての自覚を育てている。こうした項目が「先輩にもらった感動を後輩にあげられてうれしい」75名と大勢がかっての先輩の発表作品に対する感動が自分の作品作りの原動力と目標になっていたことが分かる。そして、こうした形で後輩に受け継がれていくことになることが分かる。そして、今回のオペレッタの発表経験が「自分の成長を感じられた」52名、「自信に繋がった」6名のように自信が余裕につながり、「感想文が読めてよかった」41名、「文章がよくかけていて感心した」6名、「後輩の発表も見たい」5名なども見られ、ますます先輩らしい態度も引き出されている。こうしたことから1・2年生が親近感を持ち自然な交流も生まれてくる。しかし、少数だが自分の表現に後輩の目がとどかなかったことで少なからずショックを隠せない2年生も入ることに留意しなければならない。「後輩の感想文を読む」という機会をもつことは、授業という空間と違い、自分のペースで必要に応じて選択できる自由な雰囲気の中で、自分とは違った見解や共感す

る声を耳にでき、自分も表現しやすい状況はこの学生の内面に影響をもたらす授業効果を左右する。しかし、このような場合、公開するタイミングや時間的長さ、公開物の質や量には細かい注意が不可欠である。学生の心に、「何時でも、何時までもいい」、「またか」を連想させるようになった時点で効果は期待できなくなる。「見たくなるような」内容や状況はもちろん、多少の危機感、日ごろの学生と教員との信頼関係を築いておくことなどが効果を左右する。



写真⑦

2002年度生授業アンケート「オペレッタについて」

表1 「1. 1年次科目「音楽表現」で学んだこと」

<ul style="list-style-type: none"> ○ 人間関係に関するもの 60 ・人間関係の難しさ 27 (クラス全員で作上げる難しさ、チームワーク) ・協力の大切さとすばらしさ 25 (皆で作上げた喜び、楽しさ、達成感、他の役の部分も見て協力することが大切、クラスが一つにまとまるとよいものができる、協調性) ・一人一人が大切 3 (皆で取り組むためには自分の役に自覚を持たないとまとまらない)・話し合うことの大切さ 5 (性格の違いがはっきり出て皆の意見を平等に取り入れられなかった、よい作品をつくるには各自が意見を持つ、意見を伝える難しさ、自己主張をはっきりすることの大切さ) ・自分が演じて先輩のすばらしさが分かった ○ 音楽表現に関するもの(演じ方) 58 ・楽しさ 13 (音楽やオペレッタ、表現の楽しさ、歌詞や音楽に合わせた動作、役作り、自分でイメージして表現する、身体を使って表現) 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現する事の難しさ 23 (台詞を動きと歌から表現する事、音楽で表現する、深さ、歌って演じること、思うように体が動かず声も大きく出せない、思った以上に大きな動きと声で動きを大きく見せる、見ている側に役柄・内容など伝える) ○ 保育に関するもの 61 ・音楽やリズム遊びの取り入れ方 58 (子どもに教える前に自分がやってみる、音楽やリズム遊びの取り入れ方とバリエーションを掴むことができた、活動のつなぎ方) ・教材の遊び方と発展 3 (アイデアを出してつくっていくことの大切さ) ○ 保育への心構え 10 (子どもたちを楽しませる喜び、子どもの気持ちを汲み取ること、親の目を考えてどの子も主役に見えるようにすること) ○ 自分自身に関するもの 8 (全体を考えて動く、楽しむことの大切さ、恥ずかしがらず前を見て声を出す、練習は自主的にどんどん進めていく、自分を表現する事の楽しみ方、頑張れば頑張るほどできがよくなった人に迷惑をかけてはいけない)
---	--

表 2 「2. 先輩の研究発表で学んだこと」

<p>○ 脚本のアレンジ 32 (表現方法がたくさんある、工夫、見ごたえが出る、大切さ、想像力による広がり、雰囲気の変化、発想の豊かさ、ストーリーの展開、全体の流れや通し方)</p> <p>○ 作品の印象 30 (全体の統一感、クラス独特のカラーの面白さ、やるが側と見る側の両方が楽しめる、うまかった、アレンジの面白さ、ストーリーのまとめり、手づくりの道具、完成度の高さ、レベルの違い、楽しんでやる、オペレッタへの理解、物語の面白さ、衣装や道具類のよさ、1年生と全く違いすばらしい、個々の役のカラーを出す、演技力のすごさ、練習の成果、伝えたい気持ち、自分たちとの違いに圧倒された、ひきつけられた、台詞を入れたことで内容を把握しやすい)</p> <p>○ クラスのまとめり 17 (仲間とのつながり、全員のまとめり、協力のすばらしさ、取り組み方の迫力と感動、仲間の素敵さ、クラスをさらけ出す機会、団結力の大切さ)</p> <p>○ 一人一人の存在 4 (一人一人が楽しく発表、真剣に協力し合ってすばらしい結果、ここが自信をもち同道とやることで全体がかっこよく見える、役になりきっていた)</p>	<p>○ 作品作りへの姿勢 23 (先輩のようにするためのたくさんの努力の必要性、最後に涙が出るほど頑張って作り上げる、見る側に楽しんでもらおうという姿勢、見せているという意識、伝えるためにはまず自分が楽しむ、決められた中で自分らしさを表現することの大切さ、相手に伝えるということ、準備の大切さ、頑張ればここまで出来る、一人一人の個性を生かす、全体のバランスが大切、役のイメージを持つと伝わりやすい、自分がのってやれば周りも自然に乗ってくる)</p> <p>○ 表現のあり方 26 (堂々と演技することで物語にひきつける、役になりきる、体全体で表現する、役に個性を出す、指先・目線・姿勢にも気を配る、具体的に細かく表現することで見えてくるもの、自分の個性を十分に出す、自分を捨て恥ずかしがらない、演技や表情を豊かに、演技力、楽しむ、表現することのすばらしさ、精一杯やる、一つの役の中でのメリハリ、自信を持つ)</p> <p>○ 動作・振り 14 (大きな身振り、指先や姿勢など細かい動作の大切さ、動きの機敏さ、メリハリがある、みやすい、役ごとの動きが揃うときれい、立ち位置)</p> <p>○ 発声 21 (声の大きさに驚いた、1年生とは違う、歌声なのに聞き取りやすい、発声の大切さ、声の出し方、音色の調節の大切さ)</p>
--	--

表 3 「3. 2年次科目「幼児音楽」から学んだもの」

<p>○ クラスのまとめりと協力 58 (皆で作りに上げていくことの大変さと楽しさ、信頼関係、同じ目標、全員で練習に取り組む、必ず陰で頑張ってくれる人がいる、意欲的に取り組む、他の人の気持ちを思いやる、真剣に協力するとすばらしい結果、皆が同じ思いではない、全員のやる気の大切さ、リーダーの大変さ2、友達の大切さ、参加することの大切さ)</p> <p>○ 一人一人が大切 24 (集団の中での個人の力、自己責任3、役割の重要性3、自信を持つ5、努力が必要、自発性・積極性2、意欲でよいものができる2)</p> <p>○ 表現のあり方 32 (表現の仕方、難しさ・厳しさ、大切さ、身体を使う、あいまいにしない、堂々と演じる、恥ずかしがらない、客席のほうに向かって声を出さないと聞き取りにくい、一生懸命やることの大切さ、歌や動きを合わせる、はっきりさせる、語尾の使い方、役になりきる、自分を捨てる、役になりきる、声をちゃんと出す、見る側に立って演技する、周りへの配慮、工夫する楽しさ)</p> <p>○ 発声・発生 18 (声の出し方、しっかりはっきり、客席を向くと声が通る)</p>	<p>○ 動き・振り 23 (難しさ、大切さ、動きを合わせる、歩くだけで役を表現する、歌詞をそのまま振りにしない、位置、向き、配置、立ち方、姿勢の大切さ)</p> <p>○ 細かな部分に気を配る 6 (足先・指先・目線・頭から足先まで意識する、表情、雰囲気)</p> <p>○ 作品作りへの姿勢・積極的に取り組む 9 (意見を出すことで充実感が持てた、自分の行動力のなさを反省した、いい加減に作り上げられない、諦めない)</p> <p>・周りの人に目を向ける 2 (他の役の演技を見る必要性)</p> <p>・練習の大切さ 10 (早く決めて徹底的に練習する2、パートを合わせる、台本は先に作っておく、ひとつの流れを作る難しさ)</p> <p>○ 自分の成長 7 (自分の動きの遅さに気づき努力した、精一杯やって成長する、一生懸命やる大切さ、自分勝手だった、個性を出す、全体の流れと構成、子どもを保育するためには自分の実力が重要)</p>
---	---

表4 「4. 1・2年次のビデオから」

<p>○ 発声の違い 33 (声の出し方、客席への届き方、発声がぜんぜん違う)</p> <p>○ 完成度の差 76 (指先・足先への意識、目線・姿勢と背筋、テンポ、間の長さ、表情の違い、動き方や振りのメリハリ・質・量・体の使い方・スピード・大きさ、大きく動いたほうが分かりやすいことが比べて分かった、立ち位置、細かいところへの配慮、動きをそろえる必要性、1年次はバラバラ、2年はきびきびしている、体の力の入れ方、美しさ、舞台の使い方、雰囲気、衣装、気配り、練習の成果、舞台構成、演じ方)</p> <p>○ 作品 25 (時間と努力の分だけよいものになった、台本の肉付けは本来のよさを残さなければならない、発想が出てきた、ねらいが違くと出来上がりも違う、話を工夫して作る、全体構成の仕方、練習したのとしないのでは全く違う、反省点が分かる、全体のメリハリの大切さ、見る側に立つ、楽しんでやることと見せるものを作り上げる違い、だらしなさが目立つと見ているほうはつまらない、前を向いていないとよく見えない、表現が小さいとあきるし大きいと引き付ける、演じ手が楽しめて見る側も楽しめる、無やみに違う曲を入れても変、オリジナリティーが裏目に出る、練習不足なのに本番に強い)</p>	<p>○ 成長振り 35 ・成長できた 27 (取り組みの姿勢、皆で楽しく演じる、やる気が違う、役になるとういう意識、前を見て堂々としている、自信をもって、表現力、気持ちの現れ、主体性が見える、1年生時の自分が恥ずかしい、同じ内容なのに全く違うものに見えた、習得したものを生かし自信をもって演技している、どこが成長したか分かった、1年間の重さを感じ、一人一人が成長、こんなにも変わる、1年で大きな自信がついた、成長した姿が分かるようになった、見えないところで成長している、声の通りがよい、本当に変わった、改善点に気づけるようになった、自信がつき堂々としていた、一人一人の個性が出ていた、自分もやればできると思った)</p> <p>・不十分 8 (1年は楽しくやることに精一杯で全体が見れていなかった、恥ずかしがって役になりきる気持ちが不十分、1年次のほうが楽しくやれていた、先輩のものほど感動するものではなく成長してない、自分という存在を表現できていなかった、自分の悪いところが分かった、自分では最大限と思っていたが実際は違っていた、客観的に見る必要がある)</p> <p>○ クラスのまとまりと協力 12 (練習すれば変えていける、案を出し合って難しくてもまとめた後の達成感、協調性の大切さ、個性を出しながら全体としてまとまる、苦労した分見がいがある、みんなの気持ちが出ている、団結、チームワークのよさ)</p>
---	---

表5 「5. 2年次オペレッタの発表について」

<p>○ クラスのまとまりと協力 47 (団結力、励ましあう仲間の大切さ、他の人の役にも興味をもち周りをよく見る、一人欠けても作品は完成しない、全員で完成したときの達成感や感動、個性を出し全体でまとめる、協力するとこんなによいものができる、みんなの意見を取り入れる楽しさ、最後の最後まで皆と一緒にみんなでやっているという姿勢を崩さない、自分の意見だけでは成立しない、精一杯やれば気持ちが伝わる、緊張感の中で支えあう、皆からやる気が見えた、小道具や背景も皆で合わせる、心を一致させてよい発表ができる、励ましあう、皆を信じる気持ち、人並み以上に頑張っている人の存在に気づく、一つにまとまることの大切さ、気持ちをひとつに、協力する気持ち、一人一人がクラスのために頑張る、全員で取り組むことの大切さ、くじで決まった役を精一杯演じること、人に頼らない、全員で楽しむことの難しさ)</p>	<p>○ 人に見せるということ 26 (難しさ、見せ方、自信をもつ、頑張りを見る側に伝わる、堂々とやる、見る側を楽しませる、自分が楽しんでやれば見る側に気持ちが伝わる、見ている人が楽しんでくれる喜び、演じる側と見る側がひとつになって楽しむ、間延びさせない、気持ちを伝える、見ている人を意識する、精一杯頑張る、見る側の視点に立つ、役になりきることで反応が変わる)</p> <p>○ 体験 8 (人前で演じること、見られていると思いきりよくできる、困難から逃げ出さず力を出し切ることでいい結果が出る、一生懸命やることの大切さ、練習してきた成果を精一杯出すこと、計り知れない緊張感、度胸、自分の力をいっぱいに出すこと、大勢の前でやる貴重な体験)</p> <p>○ やり終えた喜び 23 (感動、達成感、練習を積み堂々と発表できた、皆で頑張ったりやり終えた、楽しさ、喜び、面白かった)</p>
--	--

表 6 「6. 子どもの発表及び保育者のオペレッタ指導法 (導入) のビデオを見て学んだこと」

<p>○ 子どもの姿 41</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しそう 22 (楽しむことが大切、自分の役を楽しんでやっている、楽しいと子どもは元気、ピアノに合わせてできる) ・生き生きしている 8 (子どもは楽しいと思うことなら進んで楽しそうに参加する、表情がいい、姿勢がいい、自分の番になると喜び張り切る、子どもは歌って踊ることが純粹に好きだ) ・障害児も皆と一緒にやれる 11 (障害児に無限の可能性を感じた、自分で行動していた、目立たない、皆と楽しめる) <p>○ 子どもの能力 6</p> <p>(すごい力を持っている、子どものやれることの多さ、子どもでもあそこまで出来ることが分かった、子どもたちは音に合わせてオペレッタが出来る、少しの援助で子ども自身が考えて動ける、体験が自信をもたせ発達を支える)</p> <p>○ 表現力 23</p> <p>(素直に表現、素で演じる、素直にたのしむ、一つ一つの動作が大きい、全体で揃えた動きにも一人一人の表現がきちんと入っている、動きがはっきりしている、自分たちとあまり変わらない、自分の役を張り切り他のこのところも楽しくやる、リズムにあわせて動くことで動きがそろろう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えて自分で表現 7 (自分なりの表現で楽しむ、自分で自分のことをする、どの役の子も自分の役を伸び伸び演じていた、自分の役割が分かりテキパキ動く、友達に合わせてようとしていた、周りの様子をみながら演じる) ・役になりきる 7 (役を本当に楽しんでいる、予想以上に自分の役を理解している、衣装ひとつで役になりきり嬉しそう) <p>○ 導入法 24</p> <ul style="list-style-type: none"> ・素話から始める 9 (まず話に興味をもつことが大切、素話がよいということ、素話から展開していくこと) ・導入のやり方と大切さ 15 (仕方が分かった、必要性、子どもたちが自然に引き込まれるような導入法のすごさを感じた、導入次第で子どもは変わる、一人一人の様子を見ながら進める、導入をしながら子どもたちが歌を覚えてしまえるということ、教えるのではなく楽しめるように自然に導入していくとよいことが分かった、興味をもつような導入を考える) 	<p>○ 素話 25</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イメージを豊かにする 6 (イメージを広げてくれる、イメージや興味を楽しく膨らませることの大切さ、想像力を広げられるのでよい、素話の導入は自分のアレンジが効くと思った) ・話し方 19 (下半身を引き締めて座り上半身はやわらかく動かすと子どもたちが集中する、膝から下は動かさない、語尾に気をつけることで子どもの集中力が変わる、姿勢とテンポよく話すことが大切、すごく楽しそうに話すことで子どもが楽しみ引きつけられる、異年齢全員に分かる話し方、問いかけの仕方、興味をもてるように話す、想像力を広げられるよう伝える、徐々に雰囲気がいよいよ高まっていく話し方をする、面白おかしく話すことで子どもはその話に夢中になる、興味が湧くように抑揚をつける、手も使うとよい、素話であんなにも子供が集中して聞くとはい思わなかったのでびっくりした) <p>○ 保育者の表現方法 51</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しさを伝えていく 11 (保育者が楽しい気持ちでやる、子どもの意欲を引き出す、子どもたちも自然に楽しそうに歌っていく、先生が楽しそうに演技や歌を歌う、役になりきることが大切) ・自分が子どもたちを引きつける 11 (自分がどうやるかで子どもたちの興味が引きつけられる、やりたくなるよう演じる、先生が堂々とする、一方的でないやり取りの仕方、盛り上げ方、先生のきびきびした態度と流れ、先生が楽しそうに演技し歌う、教師の表現力の大切さ) ・歌い方 6 (教師の歌で子どもたちがいかに引き寄せられるか、歌う声は大きく動作ははっきりする、役になりきって歌う、子どもたちと共に歌いながら自然にオペレッタを楽しむ、歌はすべてうたい子どもが歌から覚えられるようにする) ・子どもがまねをする 7 (指先まで気遣う、教えるよりやってみる、イメージをつかむと確信した、イメージがもてるよう自らやって見せる、面白いことはまねる) ・無理やりにしない 16 (無理にやらせるのではなく子どもの興味を引き出す、子どもがやりたいと思うようになるまで気持ちを高める、話をして歌いながら動作を加えていく、まず先生の話しにどれだけの子どもをひきつけられるか、子どもを参加させてオペレッタの世界に引き込んでいく)
--	---

<p>○ 指導法 73</p> <ul style="list-style-type: none"> • ピアノの音が合図になっていた 5 (子どもにピアノを合わせる、子どもの様子を見ながら弾く、歌いはじめが分かるように弾く、合図にして進行する) • 子どもに合わせる 12 (子どもに合わせた保育者の配慮や工夫した動き、先生が余り手をかけず子どもを主とする、子どもの動きにピアノなどを合わせる、一人一人を尊重、一人一人が主役)・自然な形で子どもから引き出す 8 (自然に子どもたちの歌や表現につなげていく、自然に歌を覚えていった、自分から歌いたいと思うようにすることが大切、自然とオペレッタを知っていく) • 何度も繰り返す 6 (歌だけを繰り返す、子どもが自然に覚えられるようにする、役を交代してやる、繰り返しを楽しむ) • 子どもの様子を把握する 9 (素話の後自然に歌をいれ子どもをひきつけて乗っているかなど子どもの様子を把握する、子どもたちから歌を歌い始めているのを見て楽しいと子どもたちから何でもすると思った、子ども同士が自分の分かることを教えあっていた、イメージをもってやってみたいと子どもたちが感じていた、子どもをあきさせるのはいけない、子どもたちが自分から参加したくなるように働きかける、全体の子どもの様子、子どもたちの個性を引き出せるようにする) • 遊びながら教える方法 12 (遊びながら演じていく、歌や台詞は教えるというより保育者がやって見せ一緒にできるよう促していく、子どもたちが自分たちで考えてできる、子どもは楽しみながら覚える、すべての子が楽しんでやっていたのでこれが一番大切、強制ではなく子どもが興味をもてるようにする、子どもの自由な演じ方を大切にする、子どもの盛り上げ方で練習でなく遊びとして楽しむ) • 子どものやる気を引き出す 21 (やってみたいという気持ちを引き出す大切さ、子どもたちに興味をもたせるようにする、自ら参加したくなるような働きかけや言葉かけの重要性、子どもが楽しみ意欲的にやろうとする気持ちを湧きださせる、短時間でやる気になっていた、子どもの意欲を高めていく、自主性を大切にしている、子どもの様子を見て計算する、子どもを巻き込んでいく、楽しさを伝えていく、やらせるのではなく子ども自身が楽しめる配慮) 	<p>○ 環境構成の大切さ 62</p> <ul style="list-style-type: none"> • 子どもの楽しめる環境作り 19 (楽しい状況を作ることやりたいと思う、遊びの中で行うことが大切、振り付けに繰り返しが多いので分かりやすい、子どもたちの関係を考えて役を決める、子ども同士の表現で子どもたちはのびのび出来る、自分なりにリズムを取り興味を示す、繰り返すことで子どもを楽しく引き込める、立ち位置は印で示さなくても正しく立てる、保育者がナレーションのようにストーリーの説明を入れる、円の形態でオペレッタができる、すべての役をきれいに分けなくてもいい、出番でない子の待ち方、音や動きに慣れること、子どもが精一杯表現できる、語り手のところは全員で歌う、間の大切さ、説明よりやってみせる、できることできない子を組んで役付け) • 縦割りでもできる 5 (年少は大きい子を見てやる、大きい子がリードしている、分かりやすい合図) • 教える側が重要 13 (保育者の動きや声の出し方の重要性、先生の姿に刺激を受けやりたいと思う、保育者の動きが子どもに移る、教え方によってあれだけのものができる、語尾、教える先生で子どもは変わる、はじめて手本を示すときがととても大切、ここまで引き出せる援助法) • 環境構成の仕方 14 (人的環境を通して指導していくのがよいと感じた、自然に入っていけるような環境をつくるのが大切、保育者の人的環境が子どもの意欲に大きく影響する、子どもの発達に合わせた配置、いすの並び方など細かいところから意味がある、オペレッタをやるという風に入るのではなく楽しく自分からやりたくなるような雰囲気を作ることが大切、子どもを巻き込むスピードの大切さ、まず子どもに興味をもたせる、ねらいを考えてそれにあう方法を考えることが大切、一人から全員へと子どもを巻き込んでいく、段々人数を増やしていった楽しみながら歌うこと) • 子どものイメージや興味を膨らませていく 11 (子どもの創造が広がる、想像力を豊かにする、どれだけ子どものイメージを膨らませるか、想像力を引き出していくことの大切さ、面白そうなものをするというイメージを子どもたちに伝える、創造しやすいよう演出する、イメージを育てること、みんなで楽しい雰囲気をつくる、子ども一人一人がイメージをもって演じていること)
---	---

表 7 「7. オペレッタを体験して保育者を目指すものとして学んだもの」

<p>○ 人間関係 46</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係の大切さ 16 (いろいろな人がいる分だけ考えや感じ方がある、みんなの気持ちを考えて行動、信頼する、集団の大変さや難しさ、歌い演じることの楽しさを共感する) ・協力することの大切さ 20 (全員で力を合わせ頑張る、一人一人が責任を持つ、自分の役をこなす、みんなの気持ちを大切にしながら一つにまとめる、協調性の重要性、仲間と作り上げる喜び、一人一人の気持ちで変わってくる、楽しみながら一生懸命やる) ・集団の中で個人が大切 4 (自分をしっかりと持つ、個人を大切にしながら全体のまとまりを作ることの難しさ、積極的に自分から活動する) ・アイデアを出すことの大切さ 6 (ひとりを中心にするのではなくみんなの意見を取り入れながら進める、人の意見にも耳を傾ける、話し合いながら楽しい作品にしていく) <p>○ 経験の大切さ 26</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分ができないことを子どもに伝えられない 9 (子どもの前でやる前にまず自分がやる側になってみる、見本になれるようもっと努力をするべき、演じることや練習のときの気持ちを実感できた、体験していること自体がとても大きい、自分を出すことができ自信ができた) ・子どもの気持ちになって学べた 17 (役を演じるときの気持ち、自分の感じたことを子どもたちに当てはめるようにしたい、子どもが楽しめてみる側も楽しめる、子どもそれぞれの思いも受け入れる、やりたくない子をどうするか、一人一人の気持ちを引き出す、子どもの目線や立場になる大切さ) <p>○ 子どもの手本になる 20</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身が楽しんでやる事の大切さ 14 (自分が楽しんでいる姿を見せる、子どもと一緒に楽しむことが大切、子どもに言葉で教えても駄目、体いっばいに表現することで自分も見るとも楽しめる) ・子どもは保育者の真似をする 6 (子どもが楽しめるようなものを作る、自分のできないことを子どもにやらせない、オペレッタを通して表現する楽しさを味わってほしい、保育者がまず完璧にして子どもに見せる、大きく表現しないと教えられない) 	<p>○ 保育への心構え 19</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず皆が楽しむ 10 (上手よりも一人一人が楽しさを感じる、役になりきる、楽しくやってこそオペレッタ、やらせるのではない、子どもと一緒に楽しむ) <p>○ 保育方法 21</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの主体性 8 (全体の様子を見ながらまとめる、発想を決め付けず自由に伸ばす、一人一人が主役になる、一人一人の表現を受け止める、やる気を引き出す、陰から支える保育者の力) ・導入の大切さ 4 (まず子どもの興味ややる気を出す、話し方の重要性、役を認識し役に合った動きができるため大切、オペレッタを通して何を伝えたいか考える) ・環境構成の大切さ 2 (子どもがやりたくなるような言葉かけや環境、雰囲気作り) ・子どもの個性を生かす 7 (楽しく演じながら伸ばしたいところに働きかける、個性を大切にしながら皆で一つのことを完成させる、一人一人が輝けるようにする、その子のよさを引き出していく) <p>○ 表現法 16</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しく表現する 5 (演じることの楽しさ、体全体や歌で表現する面白さ) ・見る側の気持ちを考え演じること 5 (大きな動きの大切さ、動きをそろえるためにはしっかりと基本の動きを見せる、役を表現できる動き) ・表現の仕方 6 (歌・踊り・表情・発声、発想をたくさん持つ大切さ、リズムにあった動き、難しさ) <p>○ 自分自身 12</p> <p>(恥ずかしがっていてはだめ、終わったときの達成感、声の出し方、努力をしなくて楽をすることは無理、中途半端な気持ちでいいものではない、一生懸命演じることが見ている人に感動を与える、自分にとにかく自信をもち失敗を恐れず、人間性、社会性、子どものモデルとして誠意を尽くして物事に参加すること、子どもの前では普段の自分を捨てて子どものための自分を作り出すことが大切、普段の保育でもしっかり自分を持って子どもの前に立つ)</p>
--	---

表8 「8. 1年生の感想文を読んで」

<p>○ 努力や思いがよく伝わっていてうれしかった 42 (皆で頑張って完成させたことが伝わった、やってよかった、頑張っただけ見ている人にも伝わる、頑張った分だけ得るものがある、皆に受け入れられてうれしい、胸がいっぱいになった、思った以上によい反応で驚いた、個性が出せた、自分たちの感動が1年生にも伝わったと分かった、手作りは大事だ、身近な素材の衣装をほめられた、発想を認められた、練習の成果が認められた、小道具も頑張ってよかった、満足感がある、真剣にやってよかった、目を疑った)</p> <p>○ 工夫したことに気づいてくれた 11 (うれしかった、クラスらしさが伝わった、苦労が伝わった、曲のアレンジなど頑張った甲斐があった、意外性が表現できた、クイズ形式がよかった、工夫の成果が出た、印象に残ることができた)</p> <p>○ 細かいところまで見てくれていた 33 (やる側では想像がつかなかった、発声・立ち位置・内容まで見られている、うれしかった、衣装もしっかり見ていてくれた、違う視点に気がついた、細部まで気をつけなければいけない、思ったより大勢いて見ていて驚いた、悪いところも書いてほしい、1年生はきちんと見ている、しっかり見ていてくれた、真剣に見ていてくれた、)</p> <p>○ ほめられて過ぎて戸惑った 10 (褒められすぎ、恥ずかしかった、すごいといわれて少し戸惑った、照れくさかった、先輩を超えられなかったと思うのでほめてもらって恥ずかしくなった、うれしかった)</p> <p>○ 発声について 11 (声の出し方をほめられた、大きくて聴きやすい、指摘されたとおりの声量が不十分声が聞こえないと見ている人はつまらないと改めて実感した、声が小さかった、後ろまで声が届いた、声の大きさは重要だと感じた)</p> <p>○ クラスごとの比較ができた 4 (自分のクラスについて書いてくれてありがたい、クラスの個性が分かった、学ぶことができた)</p> <p>○ 表現したいものが演じられた 8 (伝えたいものが伝わった、楽しんでやっていたことが見ている人にも伝わってよかった)</p> <p>○ 後輩の役にたてた ・1年生の学習意欲につながってよかった 11 (やる気を出してくれるといい、後輩にも頑張ってもらいたい、刺激になるとよい、頑張ればできるといってあげたい)</p>	<p>・1年生の参考になるとよい 21 (1年生にもオペレッタの楽しさを味わってほしい、来年が楽しみだ、よい作品を期待する、ここまで楽しくできるとは自分でも思っていなかったので発表を観て興味を深めてくれるとよい、やる気を出してくれるといい、頑張ろうと思ってくれば光栄、クラスの個性を出して楽しくやってほしい、パワーアップして作ってほしい、1年生も比較し自分の成長を感じてほしい、受け止めたことを今後に生かしてほしい、楽しさが伝わったと思う、記録を残すことは先の自分につながる)</p> <p>○ 感想文が読めてよかった 41 (文に感じるその人の素直な人柄での感想が素敵、よい感想をもらえてうれしかった、様々な感想が読めた、1年生の感想文を一生懸命読んでしまった、感想からクラスのまとまりを改めて実感した、一生懸命見てくれたことが伝わる、やり遂げた感動だけで終わるのでなく感想を読んで成功させた喜びが2倍になった、もう一度じっくり読みたい、保育者の視点に再度気づかされた、一生懸命書いてくれていた)</p> <p>・文章がよくかけていて感心した 6 (役一つ一つに書いてくれて驚いた、1年生は見る眼がある)</p> <p>・観客の側からの感想内容が聞いて参考になった 12 (よかった点や反省点が明確になった、勉強になった、不足していた部分がよく分かった、大成功だと思った、第三者の観点を知りよりよい表現ができる、気づけなかったことを教えてくれた、よくない点も正直に書かれていた)</p> <p>○ 後輩の発表も観たい 5 (1年生のオペレッタも見たい、親しみを感じた、やり遂げた感動を味わってほしい)</p> <p>○ 先輩にももらった感動をあげられてうれしい 75 ・先輩に感じた時と同じように感じてくれた 49 (驚いた、不思議な気がした、去年の気持ちを思い出した、影響を与えられてよかった、去年先輩のようになりたいと思ったように感じてくれた、喜んでもらえるようなものができて素敵だ、尊敬の言葉が多く苦労が報われた、去年の感動を作品につなげられた、先輩の作品は勉強になったので先輩のを見ることは大切、先輩を見てやってみたいと思った、まさか自分がやれるとは思わなかった、こんなにたいしたことだったのかと驚いた、自分も先輩の手作りの衣装に驚いた)</p>
--	--

• 1 年生が感動してくれてよかった 22

(練習中いろんな思いがあったがこれからの励みになる、見てくれた人が楽しんでくれたのが分かり成功の喜びが 2 倍になった、見たことでやりたいと思った 1 年生がたくさんいた、後輩にこんなに喜んでもらえるとは全く思っていなかった、思った以上に感じてくれた、夜まで練習した甲斐があった、2 年生になって少しは頑張ろうと思った、楽しんでもらえてうれしかった、先輩のようにできるとは思わなかった、感想文をよんで喜びがこみあげた、1 年生の目標になっていることに感動した、驚きや感動を味わってもらえた、喜んでもらえてうれしい、もっとすばらしいものを見せてあげたい、1 年生を驚かせたいという思いが伝わった)

○ 自分の成長を感じられた 52

(1 年生の時に比べ成長していたことが本当に分かった、声の違いに驚いていた、2 年生になったことを実感した、去年の自分のように憧れを持ってくれた、1 年の速さを感じた、先輩のようになれたかと思った、自分も変わったのかと実感した、成長できるか不安だった、1 年前の自分を思い出した、私たちもなれたから 1 年生も大丈夫苦勞が報われた、認められて知らない間に 2 年生になっていたと実感した、2 年間学んだ結果なのでこれからの学び続けて行きたい、自分が思うより評価されていた、少しは保育者に近づいたのかなと思った、後輩の期待に添えた、目標になれて光栄、さすが 2 年生といわれてうれしい、細かいところに気づけるようになった、手本になれた気がした、1 年前の気持ちを思い起こした、先輩のようになれるか不安だった、2 年間の学び結果と思った、先輩のようになれた、これからは学び続けて行きたい、ほめてもらえて不思議な気分、2 年生のすごい存在感)

• 完成度を改めて知ることができた 9

(後ろまで歌声が届いていた、堂々としてかっこよく見えた、演技に見入ってくれた、完成度が高いといわれた、うれしかった、驚いた、わくわくしたといわれた、完成しか見てないと見方が変わる)

• 自信に繋がった 6

○ その他 21

(1 年生には表面しか伝わっていないが完成の苦勞を体験して理解できるといいと思った、目的とは違う取られ方をしたところもあった、イメージを違って捕らえられてショックだった、廊下でも声をかけてくれた、目立つ役でなかったので残念だった、忙しい中見てくれてありがとうと言いたい、印象が薄かったのは悔しい、自分が思ったより聴きづらかったと言われ反省、他のクラスより文が短い気がする、自分の役にあまり触れられていなくて寂しかった、ピアノについても書いてほしかった)



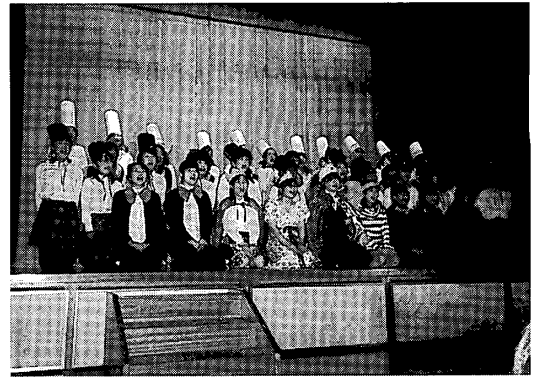
写真⑧



写真⑨

IV まとめ

これまでに考察してきた点から、授業は保育と同様、各授業の中だけでぶつ切りに内容を構成するのではなく、授業前後の内容をどのようにつなぎスムーズな授業の流れを作るか求められる。特に、学生の感情の流れや「思い」の余韻、能力の個人差などを考慮し直接的・間接的指導が必要であり、常に環境構成を心がけることの重要性を再確認した。こうした演習で具体的に形や結果が明確になる授業は根底に流れる人間関係や情緒面が大きな課題となる。教員は単に授業を進めるだけでなく授業外にも学生に対する学生の表面に現れにくいグループ内の力関係、個人的コンプレックスや悩み、実力と要求や理想、思いへの理解に対する複雑な指導と教員の努力が不可欠である。また、2年生のみならず、1年生も巻き込み一つの流れを作ることが授業効果を高めていき、それが1年生の授業の下準備となり、年毎に授業内容や作品のレベルを上げていけることも確認できた。今年度も、2005年度生の研究発表を観賞した2004年度生は感想文に感動を伝え自分たちも取り組みたいと多くの学生が希望している。しかし、あまりにも広範囲な学生指導が予想され時間的にも無理な面が多く、一人で続けていくことに限界を感じることも再確認した。したがって、今後の課題とし検討していきたい。



写真⑩

【注】

- 1) 幼児のための「7つのオペレッタ」藤田妙子 著、フレーベル館、1991.

【参考文献】

- 1 文部省編 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 1999
- 2 森上史朗他編 保育用語辞典 ミネルヴァ書房 2002

A Study of Results of Teaching for Child Care Professionals — Through the Student's Experience of Operetta —

Nagane, Rikiyo*

近年の社会環境においては、保育者を目指す学生も保育の学習以前に見直さねばならない様々な課題を抱えている。特に、生活体験の不足をうかがわせる人間関係や心身のたくましさ、保育者に望まれる豊かな表現力の不十分さは、学業や実習のみならず就職後にも問題が浮上することもしばしばである。また、オペレッタは保育現場で取り上げられることが予想され、学生が卒業後に子どもに指導する機会も多いと考えられる。そこで、こうした点を考慮し、2002年度入学生を中心に、「表現」や「幼児音楽」でオペレッタを取り上げ、1・2年次の年度を越えて授業効果について研究した結果、クラス、学年に関わらず、学生間の交流や相互理解、保育と子どもへの理解、特に、指導する立場になる前に体験的に子どもの立場を実感できた点は大きい。さらに、自分自身に対する様々な成長と自覚が育ち、保育者としての今後の課題などを見いだすなど多くの手ごたえを考察することができた。

キーワード：オペレッタ, 表現力, 学生の成長, 保育, 授業効果